

目覚ましがなる前に目覚めた、休日。

朝から出かけることになっていたので、
いつもより早く起きて、支度をした。

いつもより念入りに。

出る時間だとわかり、
ちょっとあわてて鍵を持って、
ドアを開けようとした、まさにそのとき。

携帯電話が鳴った。

あの日の会話は今でも覚えている。
そう。予定がなくなってしまった。
せっかくのデートだったのに。

鍵をテーブルに置くと、椅子に座り込んだ。

・・・なんだか疲れてしまった。
朝からバタバタしたせいかもしれない。

それよりも、せっかくの休日が、
すべて空振りになった。

さてどうしたものか。

ふと気付くと、いりたてのにおいがした。

ああ、そうか。コーヒーの時間か。

自然と体がキッチンに歩き出す。

白いカップにいれたてコーヒーが入る。

湯気と香りが鼻をくすぐり、ちょっと心地よい。

今日もちゃんと約束どおり、
コーヒーマシンは、コーヒーを作ってくれた。

—約束を守ってくれたらいいのに。

そんな願いは叶わないもの。

朝、雨が降る日は..txt

一生、叶うことはないのだ、
と私はどこかでわかっていたのだ。

なのに、期待してしまった。

もしかしたら、いつか約束をまもってくれるかもしれない。

そんな甘い期待だったのだから。

わたしはコーヒーを口につける。
苦い味が口の中に広がった。

—約束なんて、しなければよかった。

ぽつぽつぽつ・・・。
どこかで小さくたたく音がした。

思わず顔を上げて、窓に近寄った。

雨のしずくが、窓を強く打ちはじめた。
(完)

*:...。o○☆ *:...。o○☆ *:...。o○☆